【話題提起】
グローバル化と、価値観多様化
そして、日本

狩野　光伸
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 教授
日本学術会議若手アカデミー委員会 副委員長
総合科学技術会議ライフイノベーション戦略協議会 構成員
Member, Global Young Academy
Academic Editor, PLoS One

本日のキーワード：「同じ」―「違う」―「調和」

- 日本文化は「調和」を求める傾向がある。
- これまでは「調和」を実現するために、主に「同じであること」を求めてきたのではないか。（「同調圧力」）
- しかし現状で必要とされるのは「互いに違うこと」を包含できる「調和」の在り方では。
  - その先達として新渡戸稲造を挙げる。（地域という「違い」）
    - （地域1）世界における日本の存在意義　＝新渡戸稲造の例
    - （地域2）日本における「中央」と「地方」の存在意義
  - 変化の速い時代にあって世代という「違い」も、活かすべき。
    - （世代）若手アカデミーの意義

なぜ新渡戸稲造は国際連盟事務次長の職に7年信任されたか

- 「武士道」 38歳の著書。米国で1900年刊。
  - 西洋文化の深い理解を基にしている。【標準】
  - しかし「日本らしさ」に対する考察。【独自】
  - 英語でまず出版され、15か国語以上に翻訳。
  - **西洋文化に対して、独自文化（新たな視点）の提示。**

- 「なーに損してもよい、馬鹿を見てもかまわぬ、と覚悟を決めて、何をやるにも日本人らしく立派に振舞いさえすれば、だんだんと了解しますよ」
  - ➢事務次長を引き受けたときの言辞。
  - 職員から「国連の良心」と呼ばれる。

現代日本の「科学技術イノベーション」

- 「国際指標」によると、「落ちてきて」いる。
  - 「国際指標」は、誰が決め、誰が妥当としているのか。
    - 背景文化が「違う」のに「同じ」指標でよいか：**最優先するべき価値観**は？
      - 「ノーベル賞」を授与されなかった山極勝三郎(1863-1930)：世界初の人工腫瘍創出
  - 他所が決めた「同じ」指標・他所の潮流を追いかけて、「勝ち目」があるか。

- 「グローバリゼーション」における「位置づけ」。
  - グローバル化とは、実際には誰が「世界(Globe)」なのか。
    - 「同調」することは本当に「Globe＝地球」全体のためになるのか。
    - いわゆる「世界」に「同調」しないことは、どんな問題をもたらすのか。
  - 誰の何のために行っているのか。
    - 「世界」に「認められる」ため？
    - そもそも科学技術イノベーションは、目前の誰かのために行う活動か？
  - 真の価値は**既存と「違う」仮説構築と、その証明と具現化**では。
    - その価値観からの評価ができる制度設計になっているか？

- **標準（同じ）　＋　独自（違う）**　のバランス
  - 現在は「同調」すべき「国際**標準**」ばかり注目しているのではないか。

今回論点に寄せて
論点1　シンクタンク群の役割とは

◆日本で行われる「科学技術イノベーション」の価値（＝特徴＝違い）をどのように見出すか。

◆それに基づき、**指標開発**　＝　**新視点**の開発が必要。

◆その開発はまさに研究活動。

- 例：IFは我が国の価値を測る指標か。
  - 高IF研究誌の掲載論文採択決定にどれほど日本人が関与?
- 例：日本発の学術誌の価値を上げることはできないのか。
  - Open Access誌の流れ？　日本人査読者の質？

◆それに基づいた制度・政策の提案。

- 例：萌芽的研究と大規模研究のバランスの検証
  - 一般に総額ばかりに目が行くが、採択件数・関係研究者数も「指標」では?
    - 「峰」となる「違い」を創出するには、「裾野」も必要では?

論点2　問題や隘路

【1. シンクタンク同士は役割分担を進めるべきか】

◆価値観の過度の統一は危険　→従って役割分担すべき

◆「新しい視点」は既存価値観と「違う」から新しい。

◆世代・地域による、価値観の違いも活かす。

【2. 立法府、行政との関係、中立性の確保】

◆研究一般に資金は必要: 資金のための研究は危険

◆しかし出資側価値観とは「違う」新視点創出活動は重要　→中立性確保

- 「研究」一般に、出資は国税起源（立法府・行政の価値観が影響）だけでよいか

【3. 政策のための科学の推進と実践、人材の育成確保】

◆科学の価値は新「観点」創出とその証明。政策科学でも同じ。

◆より多くの人が「活きる」ための制度・政策を仮説考案（研究）・具現化する。

- 既存と「同じ」価値観に対して証明データ（統計）を取るだけでは不十分。
- 最終的に「違う」複数の観点がうまく「調和」する制度設計は必要。

◆日本がこれまでどんな「新観点」を創出してきたかを蓄積・広報

- 「違う」ことを創出してきた歴史の収集と、その歴史の国民への教育

◆これまでと「違う」キャリアパスである「シンクタンクメンバー」の存在意義を教育広報し活用する姿勢が必要。

論点3　シンクタンクの強化と ネットワークの形成に向けて

【組織間の連携体制、独立性確保、支援あり方など】

◆連携（ネットワーク形成）は、連携の**目的がはっきり**し、**各組織の「違い」**が定まって初めて有意義なものとなる。

- ◆各組織の強みと限界は何か。だからこそ、どことどこが連携し、より大きな目的達成を目指せるのか。

◆現代において「全体の利益」は代表し難い

- ◆国内生活基盤成熟に伴う**価値観の多様化(違い)**
- ◆国際比較し「日本にしか見られない特徴」
  - ◆これを**十分言語化**した上で、欠点と取るのでなく、**国際的長所（違い）として**世界の「調和」に資する方法を考えるべき

以上、シンクタンク形成とその活動においても、
互いの「違い」を長短認識して活かしあい、
それを通じて、**我が国の科学・技術を**
地球上で広く「誇れ、役立つ」ものに
してゆくことを、ご提案します